

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

9月3日に独国のバー・デン・バー・デンで行われたG1バー・デン大賞（芝2400m）を制し、凱旋門賞戦線に急浮上してきたザグレイ（牡4）が、今週このコラムの主役だ。

アガ・カーン殿下が所有するボネヴァル牧場で供用されている種牡馬ザラクの初年度産駒の1頭として、19年4月19日に仏国で生まれたのがザグレイだ。

まずは父のザラクについて解説させていただくと、07年から08年にかけて7戦し、凱旋門賞（芝2400m）や完全制覇を果たした仏国牝馬3冠を含めて、無敗7連勝をマークした近代の名牝ザルカヴァの4番仔として生まれたのがザラクだ。目立った競走成績を挙げることが出来なかつた3頭の兄姉とは異なり、ザラクは3歳時から重賞戦線で活躍。3歳春にG1仮ダービー（芝2100m）で2着、3歳秋にG1ムーラン・ド・ロンシャン賞（芝1600m）で4着となつた後、4歳2月にドバイのメイダーンでG3ドバイミレニアムS（芝2000m）を制し重賞初制覇。さらに4歳7月、サンクルーのG1サンクルー大賞（芝2400m）を制し、G1勝ち馬の称号を手している。18年にボネヴァル牧場で種牡馬入りした時の種付け料は、1万2千ユーロ（当時のレートで約161万円）というお手頃価格だった。

ザラク自身、本格化したのは4歳時だ

つたため、産駒も動き出しが遅いのではないかとの懸念があつた中、初年度産駒が2歳となつた21年10月、リザイド（牝2、ザラク）が独国における2歳牝馬女王決定戦的位置付けにあるG3ヴィンテルケーニヒ（芝1600m）に優勝。さらにその翌週には、パー・ブルベイ（牝2、父ザラン）がG1クリティウムインターナショナル（芝1600m）で3着に健闘。翌年の春になると、ラヴエッロ（牡3、ザラク）が独ダービーに向けた重要な前哨戦の1つであるG3バヴァリアンクラシック（芝2000m）に優勝。前出のパー・ブルベイが、仏国における残念桜花賞にあたるG2サンドリガム賞（芝1600m）を制覇し、「ザラク産駒は動くぞ」との評判が立つた。

その後も継続的に重賞勝ち馬が出た結果、ザラクの種付け料は22年には2万5千ユーロに、23年には6万ユーロに急上升している。

話をザグレイに戻せば、彼の3歳年上の半兄に、G1クリティウムインターナショナル（芝1600m）3着、G1仮一千ギニー（芝1600m）4着など、重賞入着6回の実績を誇るグレイグネスがいる。牝系はジャドモントが育んだアミリーで、祖母の半兄には重賞2勝の他、G1BCジュヴエナイル（d8・5F）で2着となつたエルティッシュがいるから、悪い血統では決してない。

しかし、ザグレイが1歳市場に上場された20年9月、言うまでもなく父ザラクの評判は高まる前で、しかも、コロナ渦真っ只中という最悪の状況下での開催となつたアルカナ1歳市場で、ザグレイは3万2千ユーロ（当時のレートで約407万円）で主取りとなつた。

2歳8月にデビューしたザグレイは、3歳7月に重賞初挑戦となつたG2ユージニアダム賞（芝2000m）で2着に健闘。今季序盤はドバイで重賞を3戦し、イクシノツクス（牡4、父キタサンブラック）の3着に入つたG1ドバイシーマクラシック（芝2410m）を含めて、3戦すべてで入着を果たした。

さらに、今季の欧州初戦となつたG1サンクルー大賞（芝2400m）でウエストオーヴァー（牡4、父フランケル）の2着に健闘。そしてついに、9月2日のG1バー・デン大賞で、待望のG1初制覇を果たしたのである。

バー・デン大賞と言えば、12年前の2011年にデインドリームが、2年前の2021年にトルカータータツソが、そこをステップに挑んだ凱旋門賞を制している一戦だ。そして、そのデインドリームもトルカータータツソも、凱旋門賞では高配当を呼んでいる。今年の凱旋門賞、穴ならザグレイかなと思っている。